

3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 梅雨期の 湿害対策 (共通)</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○梅雨期の湿害対策 (共通) ○デルフィニウムの栽培管理 ○ばらの栽培管理 ○シンテッポウユリの栽培管理 ○シクラメンの栽培管理 <p>6月は梅雨期であり、湿害・日照不足により花きの品質低下や病害発生が助長されるので、次の対策を講じる。</p> <p>ア 露地花き</p> <p>水田跡地や排水不良ほ場で栽培する場合は高うね栽培とし、ほ場の周辺やうね間の排水溝を整える。</p> <p>降雨による植物体への土の跳ね上がりは、病害発生の一因となるとともに、定植直後の幼苗では生育が抑制される。土の跳ね上がり防止にはマルチ栽培が有効である。また、農薬散布は葉裏にも薬液がかかるように行い、斑点性病害などの発生が懸念される品目では雨の合間を見て実施する。</p> <p>排水対策を施したほ場でも、降雨が続くと土壤中の酸素不足で根の活力や機能が低下し、地上部の生育が悪くなる。草勢回復及び生育促進には、液肥の葉面散布が有効である。</p> <p>降水量が多いと土壤中の肥料分が流亡するため、追肥するとともに、中耕で土壤中に酸素を供給する。</p> <p>イ 施設花き</p> <p>施設栽培では多雨による悪影響を直接受けることはないが、雨が続くことで施設内の湿度が高くなり、疫病、灰色かび病、べと病、うどんこ病などの発生が多くなる。暖房機の送風ファンや換気扇を利用して積極的に換気するとともに、雨の合間の防除に努める。</p> <p>施設内へ雨水が流入するのを防ぐため、施設周辺の排水溝を整備し、被覆資材の補修等を事前に行っておく。</p> <p>曇雨天時は植物体からの蒸散が抑制され、養水分吸収量も少なくなるため、過剰なかん水や施肥は避ける。特にかん水は週</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) デルフィニウムの栽培管理</p>	<p>間天気予報を確認しながら晴れの日の早朝に行く。 日照不足による草勢低下を回復させるときは、生育状況を見ながら晴天日の午前中や曇天時に薄い液肥を葉面散布するか、かん水代わりに施用する。 曇雨天が3～4日続いた後の晴天時の強光線と高温は、品目や生育ステージにより葉焼けを発生することがあるため、早急に施設内を寒冷紗で遮光し、過度の蒸散を抑える。</p> <p>生育ステージは終盤を迎え、‘さくらひめ’では3番花の、エラータム系では4番花の採花時期になる。 6月は天候の変化に伴いハウス内の気温が急変することが予想され、高温時には品質の劣化が懸念される。遮光や積極的な換気等に努め、気温の上昇を抑えることが重要である。 また、この時期はうどんこ病、ハダニ類の発生が多くなるので定期防除を行う。特に灰色かび病はまん延しやすいため、循環扇等を活用して換気する。</p>
<p>(3) ばらの栽培管理</p>	<p>曇天・長雨の影響で花卉や葉がやや軟弱に生育するため、晴天時の強光・高温で花卉や新葉に焼け症が発生しやすくなる。このため、天候の変化に特に注意しながら適切な遮光管理を行う。 また、この時期はうどんこ病や灰色かび病、べと病が発生しやすいため、薬剤防除を徹底し、循環扇や暖房機の送風ファンを活用して温室内の湿度低下に努める。</p>



写真1 ‘さくらひめ’の3番花



写真2 ばらのうどんこ病

項 目	作 業 内 容
<p>(4) シンテッポウユリの栽培管理</p>	<p>6月は生育中期にあたり、茎の伸長と花芽分化・発達に多くの水分が必要である。しかし、降雨が続いてほ場が滞水すると、酸欠で根腐れになることがあるため、排水対策をしっかりと行う。</p> <p>葉枯病は梅雨期に多発しやすく、切り花品質の著しい低下を招く原因となる。対策として、発病前から計画的に農薬散布し、予防することが重要である。通常は1週間～10日に1回程度の間隔で防除するが、降雨が続き多発しそうであれば雨の合間ごとに防除する。降雨前の薬剤散布が基本であるため、この時期の天気予報には特に注意する。発病を確認したら、罹病葉は伝染源となるため早期に除去する。</p>
<p>(5) シクラメンの栽培管理</p>	<p>3～4号鉢で育苗中の苗は、6月上旬頃、本葉が15枚程度展開したら、育苗時と同じ用土で5号鉢へ定植する。定植後は、用土に乾湿の差をつけると、老化を促進し葉枯れが多く発生するので、水分管理を安定させる。高温多湿となるこの時期から、灰色かび病や炭そ病といった病害が多発するため、頭上散水を避けて1鉢ずつ株元に丁寧にかん水する。根張りが充実した後は、底面給水管理も可能となる。</p> <p>日中の高温は生育を抑制するため、晴天日は50～70%の遮光資材を展張し、施設内温度が30℃を超えないよう心がける。</p> <p>肥培管理は5月に準じる。6月は生育が旺盛な時期であるため、肥料を安定的に効かせ、側芽、葉数を確保する。チッ素濃度が高すぎると主芽の生育が優先され側芽の形成が遅れ、反対に低すぎると生育不良や側芽の少ない株となるので注意する。葉色がやや薄めで、個々の葉が大きくなりすぎない管理を目安とする。</p>



写真3 葉枯病の病徴

(作成 農林水産研究所)